資 料 4

令和4年度　血液製剤適正使用部会報告

1　部会の設置目的

血液製剤の適正使用について協議し、輸血療法の安全性の向上を図るため、東京都献血推進協議会の下部組織として設置

2　開催時期

令和４年１１月２日（水曜日）　午後６時から午後７時まで（ＷＥＢ開催）

3　出席委員（敬称略）

部会長　播磨　あかね（福祉保健局保健政策調整担当部長）

委　員　田中　朝志　（東京医科大学八王子医療センター　臨床検査医学科准教授）

比留間　潔　（比留間医院院長）

蓮沼　剛　（東京都医師会理事）

名倉　豊　（東京大学医学部附属病院　副臨床検査技師長）

藤田　浩　（東京都立墨東病院　輸血科部長）

牧野　茂義　（東京都赤十字血液センター所長）

山本　毅　（福祉保健局健康安全部薬事監視担当課長）

4　議事

（1）令和４年度血液製剤適正使用推進事業の進捗状況について

- 東京都輸血療法研究会
- 血液製剤適正使用アドバイス事業

（2）輸血状況調査について

- 令和３年輸血状況調査の結果（報告）
- 令和４年輸血状況調査の実施（内容変更箇所の検討）

令和4年度血液製剤適正使用推進事業　実績

1　東京都輸血療法研究会

（1）世話人会　令和４年７月１３日(水曜日)　ＷＥＢ開催

第２１回東京都輸血療法研究会の開催に向け、実施方法、テーマ、演者等を協議

（2）第２１回　東京都輸血療法研究会の開催

日　　時　：　令和４年１１月２８日（月曜日）
場　　所　：　都庁第一本庁舎　５階　大会議場
プログラム　：　次ページのとおり

［研究会参加者数の推移］

		第21回 令和4年度	第18回 令和1年度	第17回 平成30年度	第16回 平成29年度	第15回 平成28年度	第14回 平成27年度
各動画視聴回数	医　師	1人	9人	11人	17人	19人	12人
	臨床検査技師	105人	198人	252人	238人	286人	261人
	看護師	2人	30人	43人	26人	28人	36人
	薬剤師	6人	16人	12人	12人	21人	17人
	事務等	26人	28人	24人	39人	33人	34人
	計	140人	281人	342人	332人	387人	360人

動画視聴回数：第１９回（令和２年度）　４２３～７０１回、第２０回（令和３年度）１８９～４０５回

2　血液製剤適正使用アドバイス事業

個々の医療機関における血液製剤適正使用への取組について、輸血学の専門家を派遣し、医療機関の状況に応じた助言や最新の知見提供等を行う。令和４年度は、２年度、３年度に引き続き web 会議方式により実施した。ただし、令和４年度は、医療機関側から希望があった場合は、訪問でも対応することとした。

・実績：４病院（応募１４件より、新規病院、前回訪問から長期間経過している病院を優先として５病院を選定した。うち１病院が辞退。実施病院のうち、新規は３病院。）

3　輸血状況調査

都内の医療機関における血液製剤の使用状況を把握し、適正使用を推進するための資料とするため実施

（1）令和３年輸血状況調査　結果の公表（概要：資料５）

対象医療機関：都内 614 病院、調査対象期間：令和３年１月～１２月

調査データに基づき病床規模別の血液製剤使用量の平均値を算出。各病院の実績との対比表を作成し、自院の現状把握に役立てていただけるよう返送

（3）令和４年輸血状況調査の実施

・調査票「血漿分画製剤の使用状況」に、令和４年中に追加された規格や新規販売された製剤を追加し、販売が終了した製剤を削除。

第21回
東京都輸血療法研究会

日 時
2022年11月28日（月） 16:30～20:00

場 所
東京都庁第一本庁舎 5階 大会議場（定員550名）

参加費無料：参加申込書に記載のうえ、当日ご持参ください

第1部

Ⅰ 令和4年度 献血功労者 厚生労働大臣表彰・感謝状伝達式
東京都知事感謝状贈呈式

Ⅱ 献血セミナー ～ 献血の現状と課題 ～
田中 真人 東京都赤十字血液センター

第2部 東京都輸血療法研究会

Ⅰ 基調講演：大量出血症例に対する輸血療法としての新規血液製剤の動向
座長 牧野 茂義 東京都赤十字血液センター
演者 宮田 茂樹 日本赤十字社 中央血液研究所

Ⅱ 輸血療法Q&A
座長 安藤 純 順天堂大学医学部 細胞療法・輸血学
奥山 美樹 東京都立駒込病院 輸血・細胞治療科

① 臨床検査技師へのタスクシフト・シェアについて
演者 奥田 誠 東邦大学医療センター大森病院 輸血部

② 『血液製剤等に係る遡及調査ガイドライン』の一部改正について
演者 飴谷 利江子 東京都赤十字血液センター

Ⅲ 輸血療法シンポジウム ～周術期輸血の管理～
座長 佐藤 智彦 東京慈恵会医科大学附属病院 輸血・細胞治療部
田中 朝志 東京医科大学八王子医療センター 輸血部

オーバービュー
藤田 浩 東京都立墨東病院 輸血科

① 周術期のPatient Blood Management -術前貧血対策を中心に-
池田 敏之 東京大学医学部附属病院 輸血部

② 周術期輸血の看護
中野 恵美 東京都立墨東病院 看護部

③ 周術期における止血戦略
木田 康太郎 東京慈恵会医科大学 麻酔科学講座

ディスカッション（総合討論）

主催 東京都
共催 東京都赤十字血液センター

後援
- 東京都医師会
- 日本輸血・細胞治療学会
- 東京都薬剤師会
- 東京都看護協会
- 東京都臨床検査技師会

日本医師会生涯教育制度 【合計単位1.5単位
(カリキュラムコード7（1.0単位）,0（0.5単位）】

日本輸血・細胞治療学会認定医制度
認定輸血検査技師制度
学会認定・臨床輸血看護師制度

資格審査用証明書発行

お問合せ
東京都 福祉保健局 保健政策部 疾病対策課 TEL：03-5320-4506
東京都赤十字血液センター 学術情報・供給課 TEL：03-5272-3519

令和3年 東京都輸血状況調査集計結果（概要）

資料5

1　調査対象・回答率

(1) 目　的

都内の医療機関における血液製剤の使用状況等を調査し、適切な血液製剤使用の推進をしていくための資料とする。

(2) 対　象

都内にある病床数20床以上の医療機関：614箇所、令和3年1月～12月を調査対象期間とし、郵送にて実施。回収方法は、郵便、電子メール、ファクシミリのいずれかとした。

(3) 結　果

504機関（回答率82.1%）（前年：615機関中493機関　同80.2%）から回答が得られ、うち一般病床100床以上の機関は194機関(同91.9%)であった。

得られた回答は「令和3年輸血状況調査集計結果（概要)」としてまとめるとともに、100床以上の194機関の回答を元に「評価指標」を作成した。

(4) 報　告

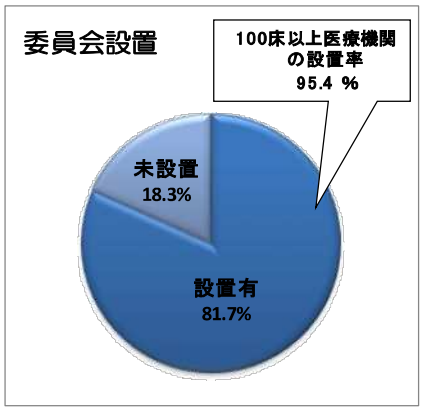
「令和3年輸血状況調査集計結果（概要)」「評価指標」を都ホームページにて掲載するとともに回答のあった全医療機関に送付する。また、100床以上の194機関については、「令和3年血液製剤適正使用推進に向けた評価指標について」（個票）を作成し送付する。

2　集計結果の概要（項目別）

(1) 輸血療法委員会の設置状況

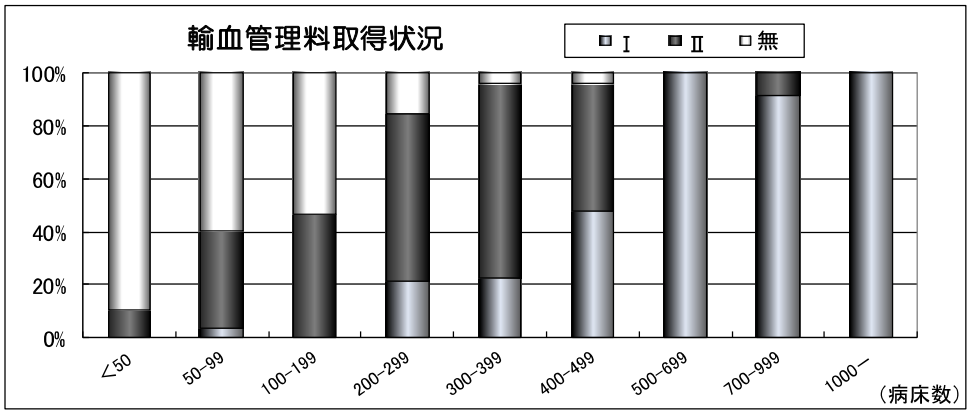
委員会を設置している医療機関は、412機関（81.7%）であった。
（前年402機関 81.5%）

一般病床 100 床以上の 194 機関でみると、委員会設置は 185 機関(95.4%)であった。（前年186機関 96.8%）

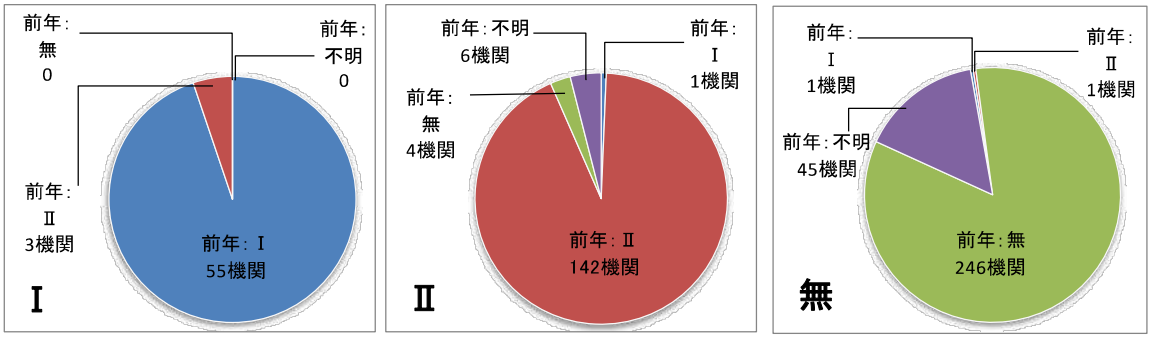


(2) 輸血管理料（Ⅰ・Ⅱ）の取得状況

取得機関は211機関（41.9%）で、内訳はⅠ：58機関、Ⅱ：153機関であった。（前年　209機関42.4%　Ⅰ：57機関、Ⅱ：152機関）



輸血管理料の取得状況の変化（前年対比）



(3) 院内採血の状況

採血者数は0人（前年：0人)、採血量は0U（前年：0U）であり、前年と同様である。

(4) 輸血用血液製剤の使用状況

ア　赤血球製剤の使用量は642,058Uで、前年625,712Uとほぼ横ばいである。

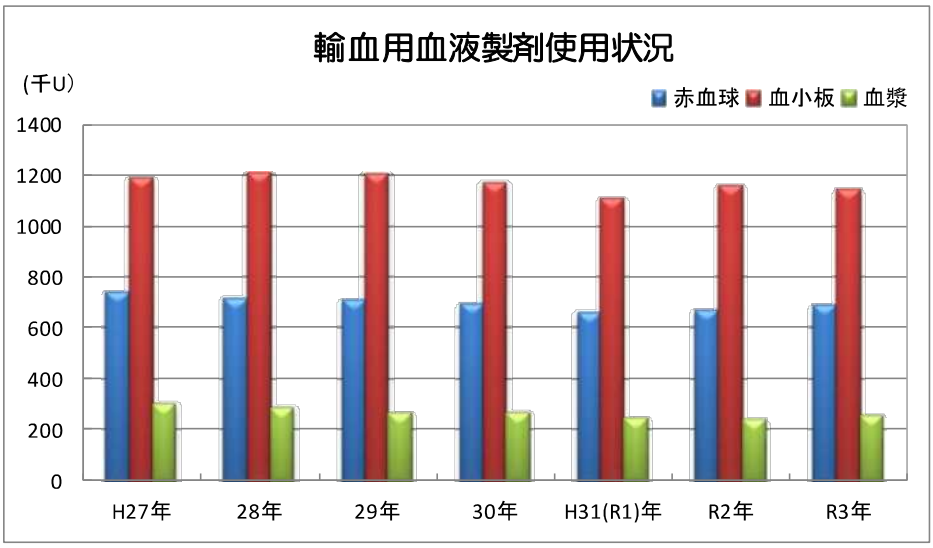
イ　血小板製剤の使用量は1,137,884Uで、前年1,155,146Uとほぼ横ばいである。

ウ　血漿製剤の使用量は253,590Uで、前年235,101Uとほぼ横ばいである。

エ　全血製剤（日赤製）の使用量は4Uで、前年10Uより減少した。

オ　白血球濃厚液の使用は5機関あり、使用対象は顆粒球輸血（1人)、ドナーリンパ球輸注（18人）であった。

カ　同種クリオプレシピテート作製本数は、新鮮凍結血漿（FFP）LR240から95本（4機関)、LR480から1,208本（8機関）であった。



(5) ＧＶＨＤ予防のための放射線照射血液の使用状況

輸血用血液製剤使用病院398機関中の全てが照射血を使用しており、前年の100%と同様である。

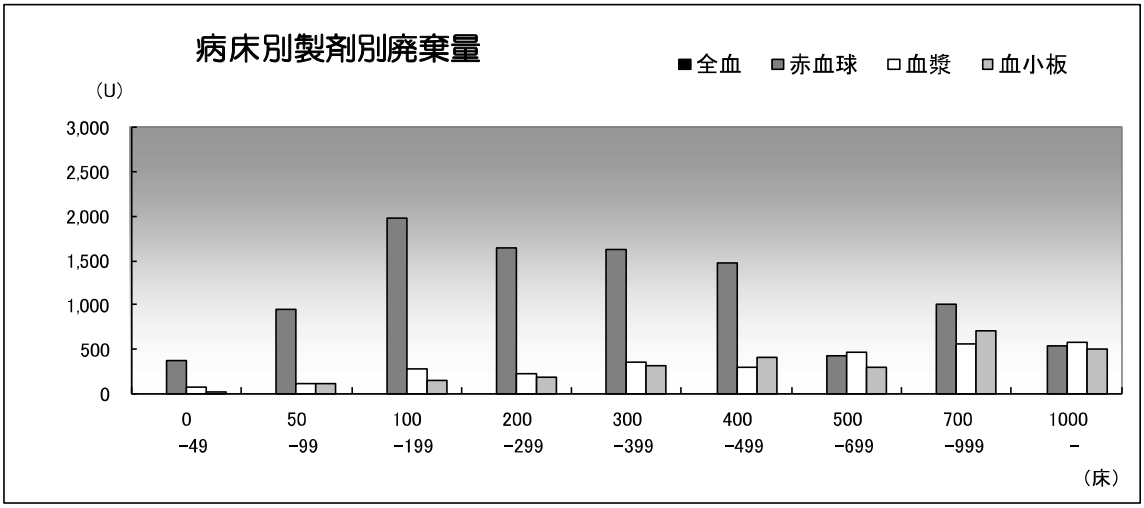
(6)　製剤別購入・廃棄量の状況

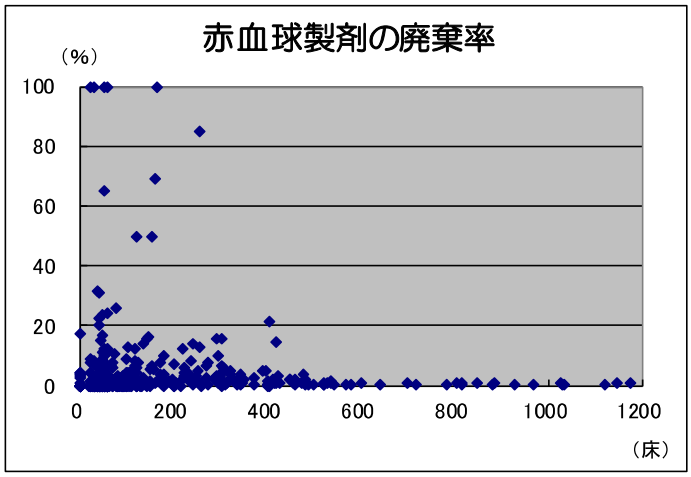
ア　全血製剤の廃棄はなかった。

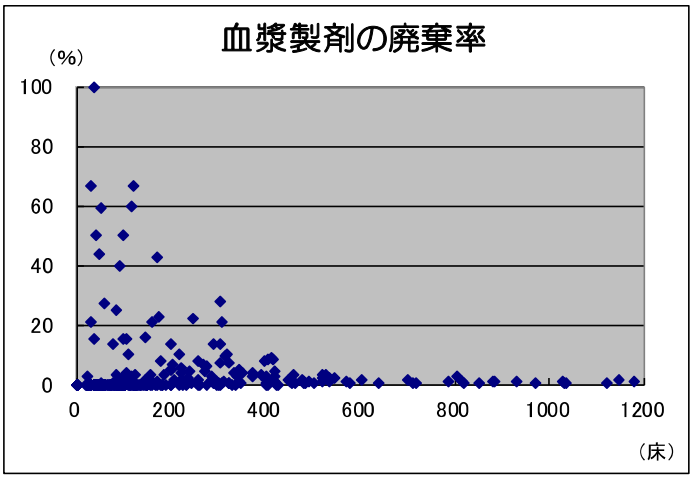
イ　赤血球製剤の廃棄率は1.5%(10,025U)で、前年1.5%(9,255U)と横ばいである。

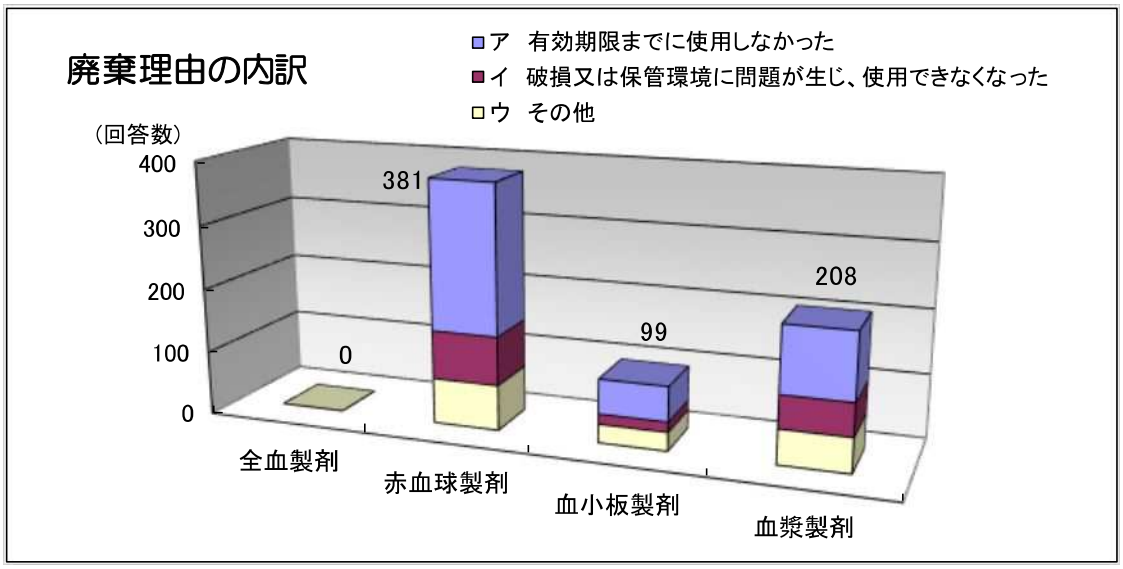
ウ　血小板製剤の廃棄率は0.2%(2,700U)で、前年0.3%(2,962U)と横ばいである。

エ　血漿製剤の廃棄率は1.1%(2,913U)で、前年1.5%(3,849U)より減少した。



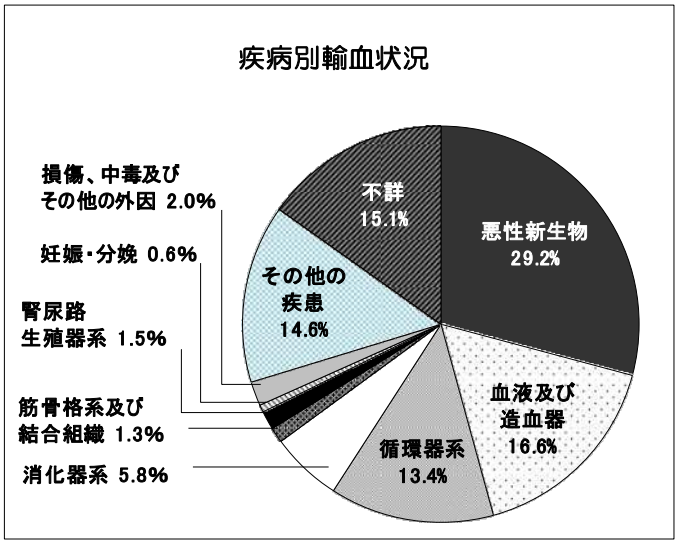


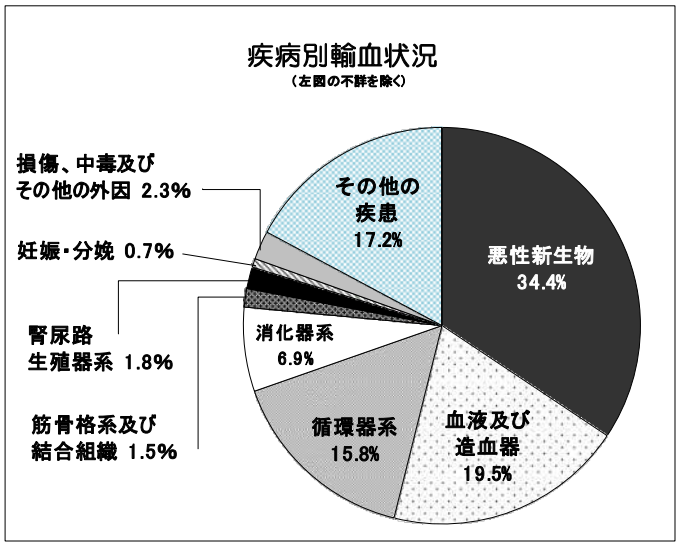




(7) 疾病別及び年代別輸血状況

・疾病別では、悪性新生物の治療に全体の 34.4%が使用されており、前年（36.4%）とほぼ同様である。

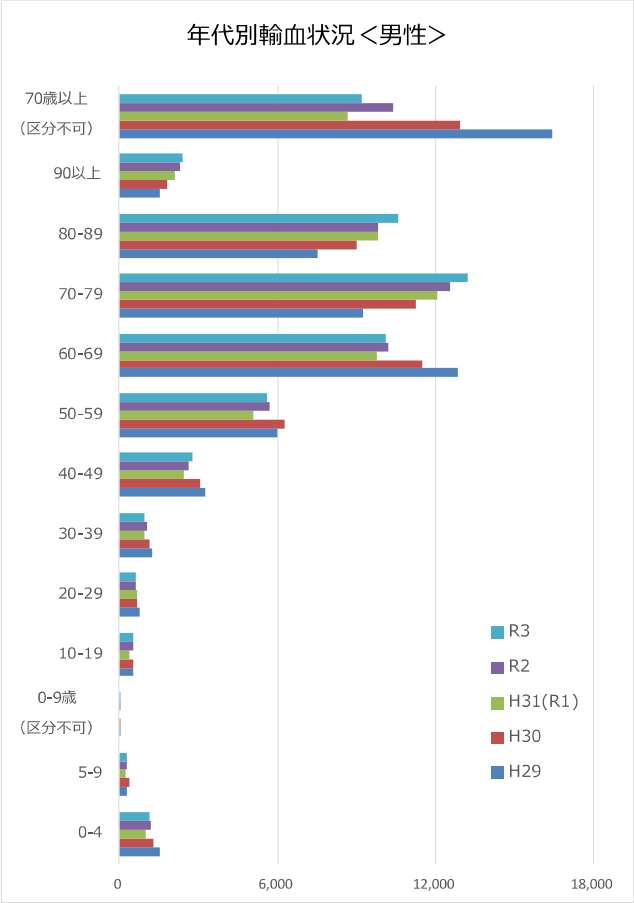


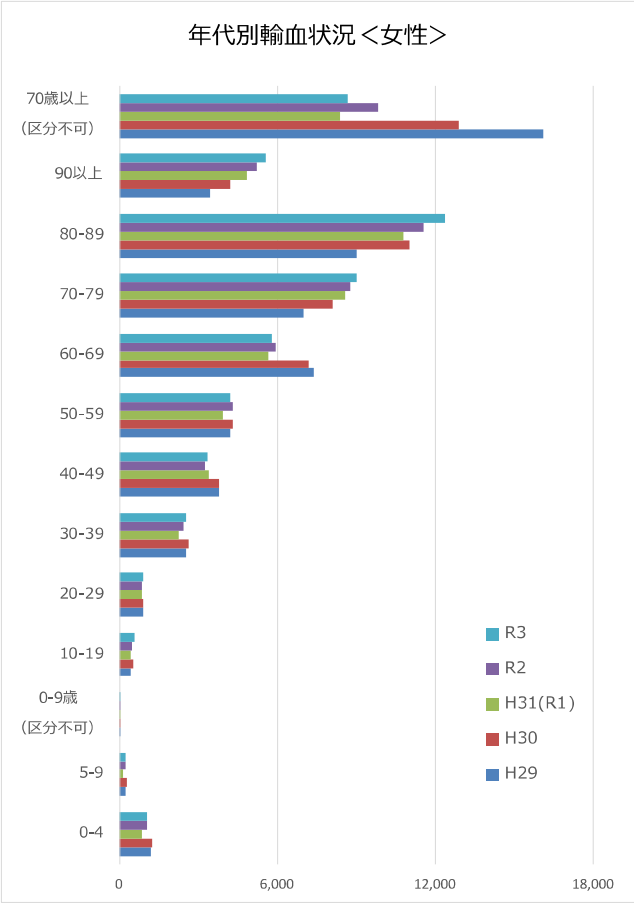


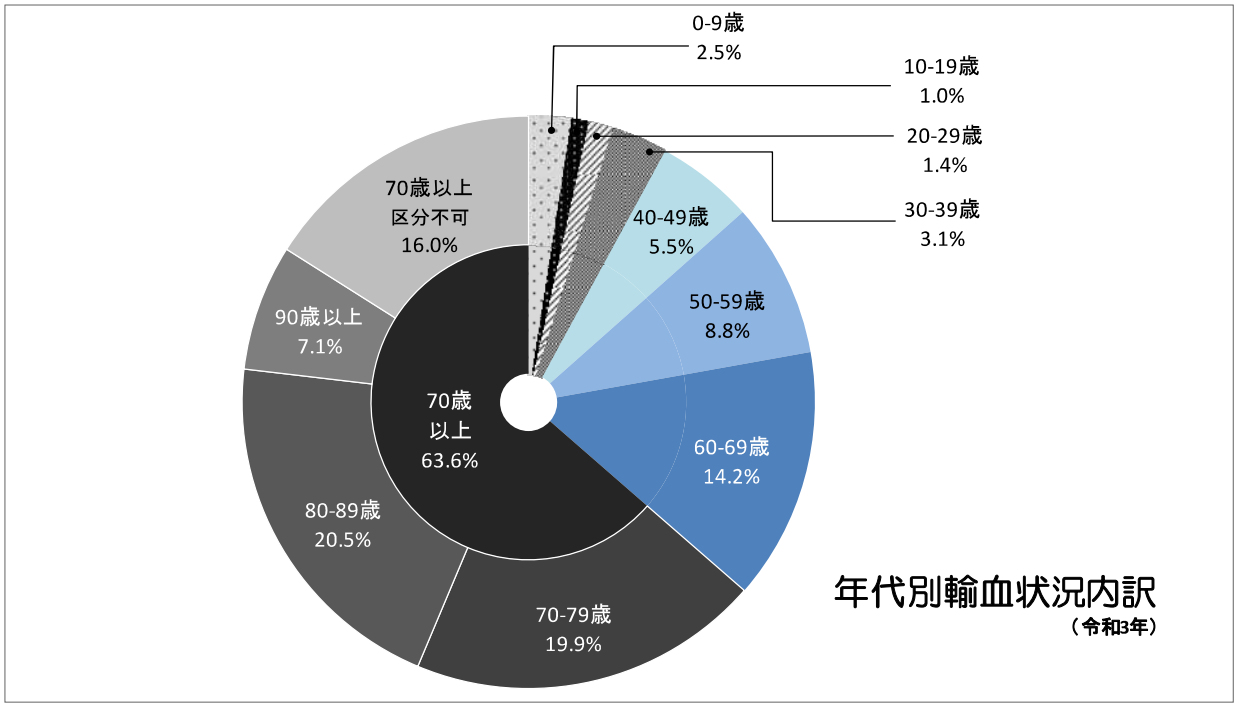
※構成比は小数点以下第２位を四捨五入しているため、合計は必ずしも 100 とはならない。

・年代別では、50 歳以上の患者への使用が全体人数の 86.6%、60 歳以上　77.8%、70 歳以上　63.6%で、いずれの区分でも前年（50 歳以上 86.8%、60 歳以上　77.9%、70 歳以上　63.4%）とほぼ同様である。

※同一人について:30 日間の複数回使用は１人としてカウント。70 歳以上で 10 歳ごとに区分できない年代については「区分不可」として合計値で表記。



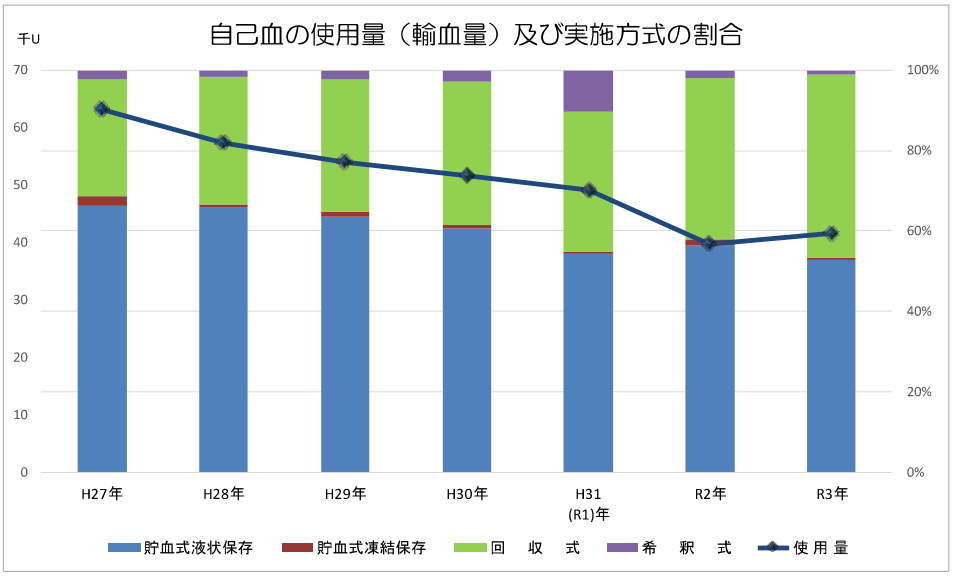




※構成比は小数点以下第２位を四捨五入しているため、合計は必ずしも 100 とはならない。

(8) 自己血輸血の状況

自己血の使用量(輸血量)は 41,497.2Uで、前年（39,719.3U）と横ばいである。

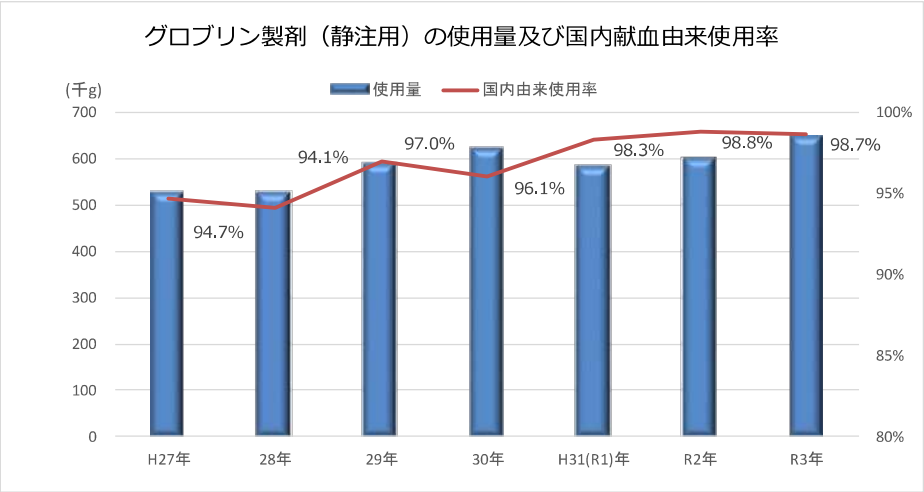


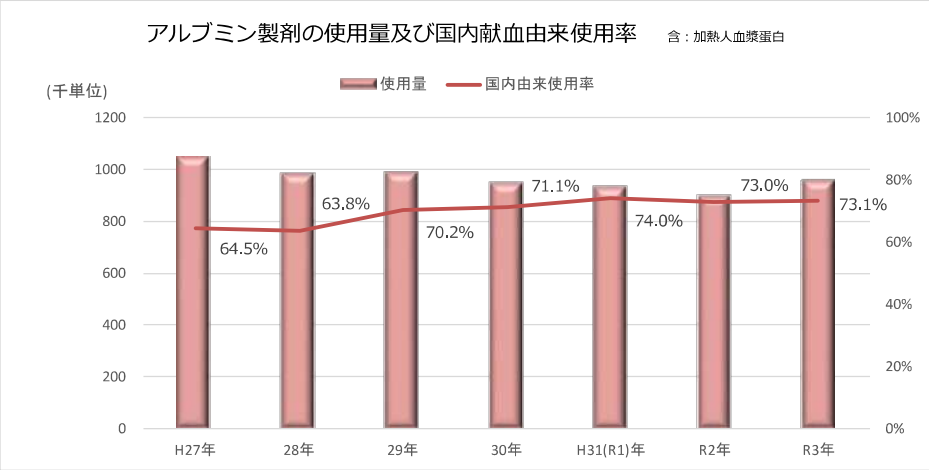
(9) 血漿分画製剤の使用状況

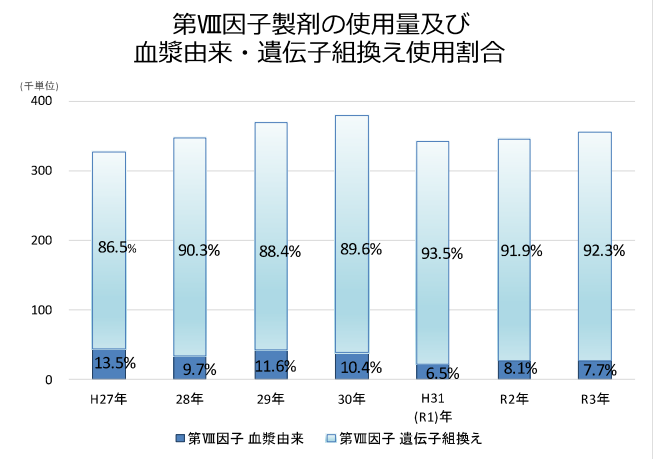
血漿分画製剤（トロンビン及び組織接着剤を含まない。）の使用量は 484,176 本で、前年（460,416 本）より増加した。

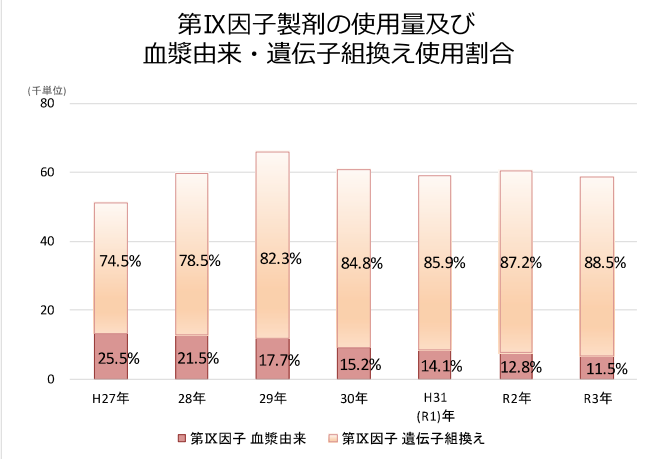
なお、グロブリン製剤(静注用)の使用本数における国内献血由来製剤の割合は 98.7%（128,963 本)で、前年 98.8%(123,503 本）と国内自給率はほぼ同様である。

また、アルブミン製剤（加熱人血漿蛋白を含む。）の使用本数における国内献血由来製剤の割合は、73.1%(178,705 本)で、前年 73.0%(168,053 本)と国内自給率はほぼ同様である。









※機能代替製剤、複合体製剤は除く。1 単位=250IU